

研究結果報告書

沖縄文学研究

－大城立裕『小説琉球処分』と松田道之「琉球処分」の比較分析を通して－

所属： 釜山外国語大学校 日本語学部

役職： 招聘教授

氏名： 朴 正伊

本研究は、大城立裕の『小説琉球処分』が 処分官であった松田道之が書いた史料『琉球処分』を作品化するに当たり、歴史的事実から何を捨象し、歴史上の人物をいかに描写しているのかを明らかにしようとしたものである。『小説琉球処分』は1章から24章まで24章立てになっている。第1章は「物語の背景」というプロローグとして「古い沖縄になじみのうすい読者のための前置き」であり、第24章は1872年から1879年琉球処分断行以降、1880年「清国嘆願使節」のことから1893年毛有慶の死などが描かれている「エピローグ」である。この2章を除いた22章の内容は1872年5月から1879年9月まで琉球処分の成り行きが描写されている。一方、史料『琉球処分』は三冊に纏められている。一冊の始めに伊地知貞馨の「琉球処分起源」があり、1871年から1874年まで、二冊には1875年から1878年まで、三冊には1879年の公文書が載っている。

『小説琉球処分』と『琉球処分』を比較して以下、二つのことが分かったのである。一つは『小説琉球処分』の作品構成である。『小説琉球処分』の「プロローグ」は『琉球処分』の「琉球処分起源」に対応できる。また「琉球処分起源」を書いたのは伊地知貞馨であり、『小説琉球処分』の2章に始めて登場するのもほかならぬ伊地知である。そればかりではなく、『小説琉球処分』には1875年の内容が7章、1879年の内容が5章にかけて描かれているように、史料『琉球処分』も1879年の公文書が一番多く、次が1875年である。つまり、『小説琉球処分』は章立てするにおいて史料『琉球処分』を充実に再現しているといえる。二つは『小説琉球処分』に描出されている史料『琉球処分』の「公文書」内容は11箇所だけで、作品内容の大部分は登場人物の対話によって構成されている。要するに作家大城立裕が史料『琉球処分』を参考しながらも歴史的解釈を下すより、歴史の中で生きている人間像を描きたかったからではないかと考える。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「沖縄文学研究-大城立裕『小説琉球処分』と松田道之「琉球処分」の比較分析を通して-」・朴正伊・大韓日語日文学会・11月14日・新羅大学校(予定)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「沖縄文学研究-大城立裕『小説琉球処分』と松田道之「琉球処分」の比較分析を通して-」・朴正伊・『日語日文学』・来年5月(予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)